町人考見録

ロ仁9
108
4

門 口之9
帙 108
巻 4

町人囊巻四

或人はゝ男女ともに厄といふ事あり町人ともにさもあ
らん人多し唐土の書典中にも厄深ざるより此故なや
唐人い厄といふるゆゑ醫書の中にい男女七歳より
九年わづかに人の陰陽変ずるゆゑ是を大忌の歳
といふて慎べしとあり又或人の云男子い少陽乃数
とゆゑて歳を成ゆゑ八歳より氣血完て十六歳
あて精通しかくれぬくに八年ばかりて氣血愛し立
八四十歳にて血氣滿て四十二歳にてろろく血氣お
とろへ行ゆゑ四十歳にて初のまたいとまり漸く

血氣衰て八〻六十四にて血氣尽れハ精はくなる
となり女人ハ少陽(せうやう)の数(もと)にて形(かたち)成(なる)ゆへに七歳より
血氣定り十四歳にて經水(けいすい)いたり又七〻三十五歳まて
氣血盛る故より漸(ぜん)〻衰へ行て七〻四十九歳にて
經水(けいすい)絶(たえ)血氣尽て懷胎(くわいたい)なし是又醫書(いしよ)の説(せつ)なり
人によりて少しハ不同(ふどう)ありといへとも大概(たいがい)かくのごとし兎(と)
角(かく)人ハ四十已後(いご)より陽氣(やうき)衰(すいろう)へ行時なれハ身の
養生(やうじやう)の時なれ之禍福(くわふく)乃事ハ定り有ことハ又うけ込を
とハいふものなりけれハ人によりて商賣ひろく致(いた)して身(しん)
代(だい)をつくる人ありむけよりて悪き事而已(のみ)ありとも

ありなんと深く甚何分にあらさる事なれハこれゆへ
なりと心へうけて慎(つゝし)むへきなりけるそ惑(まど)ふへからず
或学者の云酒(さけ)ハ量(はかり)なし乱(らん)に及(およ)ばずといふを悪く心得る
人多し乱といふハ醉狂(すいきやう)のる也と心へたる大なる誤(あやまり)也乱に
及ばずといふハ心ゆるまり形(かたち)おこたりゆくを乱に及ぶといへ
こりかくれごとくの事なれハさる所乱に及ばずといふ道
世俗(せぞく)の人喧嘩(けんくわ)口論(こうろん)放逸(はういつ)のふるまひとなさる所乱に
及ぶと心得たり是ハ乱に及ぶ所の段(だん)を越え大醉狂(すいきやう)
といふもの也孔子(こうし)の宣(のたま)ひし乱ハ醉狂乃儀にハあらじを
始(はじ)めハ人酒をのミ中比ハ酒が酒をのミ終(おわ)りには

酒人と欲くるや酒ぐ酒飲い礼也酒う人と飲い是
を辞ぶる事易の辞より酒と飲て貢紙濡と亦節
と不知いて貢紙濡とい酒う酒のし也節て云
らんといはのまろ程くけ加減をもくさるく辞ぶい
又此うへなる武士い上に主人なる故酒の礼多という
事をもく所町人い上より主人なる故酒の礼多という
ある人けいるいいるいの者ともいう今け質朴なる
いう程のもう殷け紂王始めて象牙の箸を造る
箕子という賢人是をみて紂王驕りけ必ず米象象
牙け箸ける時是より又玉の杯を造るべしといひよ

業のもくに又玉の杯を造れり是より色て治く美業なる
驕りもとおもりも也唐土の天子ふれい常に象牙の箸貢紙
開やもいう古驕りといへき行のもにわ孫芸天子もくへ
ともも古い象牙け箸ぶく用ふ事ぶく竹又い木の箸を
用ひもくもくもう近代唐和より象牙の箸いうよ及い
も瑪瑙琥珀して造るる盃色ぐけ彫物をく打淡也
ま今い奢ともれ也いう人ぶ唐も日本も来代の
過美い同ものもくもう延喜式よ宮女の数も官位
おきい角の指櫛とも用る事不付官位ある女房角
の指櫛とさもくもう玳瑁をい昔い笄のかい

櫛かうがい造りて指らす事也今代い扨猪とい鼈甲
とて筆いつよ及いと櫛ハ造りて下賤の女も常ハ
頭よりてつよる也角の櫛をい知いてはと人
ハ扨猪も稀いまと賤しとて甚上に金銀をちりばめ
て是をさすてふハ人ちりぬいてわさ海といそれ
或人ハ云ふハの事ハ偏に自由ふいよりねる也近
代い物毎巧ミハ自由ふいよりねる也近
間いもの人ハ実儀よ及ふる也古の人い玄欲實儀
ハて世智辯よ及ふる也信長公時代まてい
挾箱といふのハ挾竹といて大なる竹をちりて

衣服ハ紙もう紙よハさみてハけさせうとうやむ
ハ人いハ鈍ふうとそ挾箱のオ覚ユ支ふうるを
ハ是玄欲質朴ハれい也古乃火ふら袋人ハ袋
巾着ハ変を古の火打袋い大名といた布ハいハ
ハ浪そハでハよいハふるハ紙付ふうといふ商代
乃巾着い七寶をかされふ冊数毎ふ也非といふ
或人ハ云世上よ講といふのさハくハふ古ふう事也
玄ハふう講のを云と呼て毎ふ講を好む人い
家明寺般ハ所のふふ貪を神のをふハ宿ハ古乃
講ふいハ一郷一村毎月ハ日紙定て寄合てれ

親しく学問有人なる紙招きて之社の詫宣又い公儀より
その所壁書等を読まして謹て聴聞し或い出家と請
して經文并一句をも講説をもし或い真宗門の教法を
さまざまと講きもして是を聴聞し又い面々相勤めしより
信心乃志紙くもりて本心の誠をもしなるものもん
事と称し人是と講こいいより真宗諸の一句をも講
説とゆへなり近代乃講い酒を呑世乃とり沙汰さ
ほくまて誠と云ふ并多とけある事いうくて結句
口論放逸の媒となるへきる多くさいと徒
或人のそ人并公い扶しきものなり唯今あ人対して別

乃ものへ人ものとつた人よりそ紙をけさ紙をれ
い盛きるとつた堪忍ふく一命をもけそるの身
しよいつ必ずもの勇者ものても相撲とる行めるの時は
諸人の前そはをうくれ見てそうそ紙さ徒ても
扶きあるる折多ひてくくとちて入いおくしくれを
ひてとつよ一法の怪紙も業門をはてる者をは
盗人とりなて人と思りて折柳とる借用とる行その
千金宝重紙をれしても物くむ人に相撲も空
嘆しのあけらく事い同盗も借用も人よ物と
とく扶く事い扶れしといひて矣ぬ

或人のいつかい正五九月をよろこぶ用ゐるゆゑ婦人事
を得たる博識の学者ゆゑ書ものゆゑ出家の人
はいつり但佛書の中に正五九月を斎素月と云
いひて此三ケ月は死刑殺生を禁ずる故なり委くい
事類全書に見てしるべし唐土よりの事なるゆ
ゑ月本にて正五九月を忌ゆゑ悪事多
なるはいまの月をあらく善事に正五九月ゆゑよく
行ひてこそよろこぶべし何の忌嫌ふ事あらん
或学者の云二季は彼岸ハ四氏生て善根を修し佛
事ゆゑ善悪をむすぶ故也二月の中節と春分

といひ八月の中節と秋分といひて晝夜の長短大形
ひとしき所なる也此時月輪天の中道とめぐり給ふ故
天地の氣温和なるゆゑ人民仁慈と行ひてよろ
しき理也但彼岸の中日い毎年春分秋分の日より後五
日あり此間ゆゑの也月輪天の中道をめぐり給ふ日より
五日と更ゆゑ春分秋分也但天竺の運氣とて定
まりのかたいつる人もあれ共天竺の運氣と日本にて
用ゐる氣候とは異なり此国鬼角いつまでも春分秋分の
間い天氣温和の節なれい寺院の静なるゆゑ徘徊して
一日乃間此樂んもとめんとなるといふ

或人の云七月は盆を一偏は佛道の儀なれども七月十五日と中元の日とこゝにて儒道にも位牌を祭る事あり
いつまでも祭りは三日又は七日潔斎をなるべし中元の
祭りと致さん人は十二日ゟ潔斎の儒の像造燈
籠も飾られて天竺佛法の元はあれども唐土にあると
尺くらう又日本にては聖霊祭の祥も一向に佛法のを
を用ゆるものもあれども萩青蓋の造土器麻ゝ
の者をも唐天竺の者なれはいわれ神道の玉祭の祥
なりといつる又は鯖も佛法儒法もあれ神道乃
風俗ゆへ佛法日本に渡りさるいまだ七月ゟ

ゟ云いつる日ゟ神道の祭いつれも古禮を用る
事なれは鯖と用ひて先祖の靈とゝ云ひ
を佛法渡りて宇蘭盆の祝日ゆへ其方とは合ゝ和
ゟん都て盆の禮とそ云ひ方へ從来ゝ也公家
方にて盆の禮といつる事や細川幽斎老吉田
兼岳あり又鳥丸光廣卿和哥の師なる家七月十四日
盆の禮ゟ吉田へ参ゝ耳底記ゟ又躍も世俗
の事なゝ神道ゟ近て儒佛のはいわれいつまは
て盆の祭りゟ也儒道のゆへ面ゝに春秋のふと
する事い町人百姓い叶ゝ也あて世ゟひろれて一年ゟ

一度ゆるしなき人をゆるして墓に葬ひ位牌とふるゆ
るいおのほう〳〵儒の祭祀ゆうるひたるゆん民をいろう
ちゐて知ちしへ〳〵次儒者の聖霊祭に多の人い儒法
乃ふふ礼古人ひとくとり紙ひ一〻夫をもゆるゆるく是
をも用る事なき人いうふる侍へうやといてし作一
同人のいつるい日待月待に毘竟ゆに
濁〻きんの事也家門と清め合事と改め衣服と改
め心と改めて神明をまうまるゆの也庶人なるの身と
して神明と家門とゆふとい畏き恐なる敬は
日月ふよりてなりて拝ゆる也神明い我国の至尊

ゆれい所人百姓ゆふ所ゆふとゆるゆハ非礼なる道理ゆ
ゆ人神明とゆふとゆて月待日待とゆるゆの也日月い
ゆ〻きゆ清めて中ゆ清〻ゆるゆ敬ゆ月待日待とゆひ
て神ゆふとゆいとゆる也日月い天の神明ゆて神明い地の
日月ゆれいゆるゆて日月ゆて道理ゆれ日月ゆて神明と
ゆとゆ今日人心のゆ人ゆ初めてゆ別ゆ天をゆ天ゆふ
らゆゆふゆゆるゆ〻ゆ天道ゆ神ゆ天ゆ拝ゆるゆ
ゆは庶人ゆ憚ゆるゆのゆれゆふゆ拝ゆゆい別也
祭ゆ貴人ゆゆ紙振舞ゆゆ拝ゆい日ゆ侍ゆ出ゆる
ゆゆ公方様ゆ申侍ゆ人い日ゆて其数ゆ

宵て常の人に叶さる事多仏に因て得よ出る人い多き
ゆゑ天地ゆ府い日月星辰いよ及ぶと地も其中に
ありて天地神明と盡くを系ぎい天子も其中小日月をい
庶人も和国の風俗よ志てうひて神明の御本躰と云ひて
拜ませんい憚るゆ是何を以ても本朝の風俗と云て悪
名を降伏もろくれ笑物紙稜ひ清らんとの事多れい
誠とわ云て神明日月をい拜ひしと也又日論語ゆ
疏食菜羹といへ共必ずとあるといる強ちに祭祀のゆ
ゆわるも時の初物を以て先祖を祭るといひて若
しゆ又證拠也志ゆゑい日待日侍よ神供ゆと備ゆ

ある以ゆゑ云ひても憚ゆゑ也祭禮の儀とい各別ゆ
きいせといゆゑ又いるい月待日侍よ大酒小肴こ味線よ
て遊ひて夜を明さ人あゆ浮月様浮日様をれのまゆ
古敷ゆらにとゆゑのかく大多ひきゆ紙ゆゆ
武人乃物語よ謡平家舞いよ及ぶ浄瑠璃小説の類
も昔のい人に教誡に也ゆき事多ゆ河の盧表人乃
善悪以訓て勧善懲悪の保し人に多以て和しきん
乃也浄瑠璃い信長乙時代より始り義経の世ひ人
浄瑠璃清水の事とはゆて音曲とおゆ其後考出の
比ゆゑて西に宮乃傀儡師とかゆひて人形と因いさせ

うち其ころの浄瑠璃いみな義経記平家物語曽我物
語の面白かりてやけきき事多くうた道中の浄瑠璃と
いふものいとけなきものたちと家一とするゆへ邪欲の媒
となりて人をそこなふ是より又高きものの方奇妙也
この始め女楽なりし出雲の大社巫女国くに又義女神楽
を立て舞出し京都にまりて奇舞妓の曲ゆる也
より漸く世に繁昌して人の名を蕩し誰うて人をそう
こなふる事是に伝て高代女義と言禁制あり其
後又義男の女年とりて義となりし是も又諸人を
誘ふ事女楽に同じ男の誰ともいへぬ美少

乃義に男女共に誰と事實少又是を禁ぶ結ひ
て義男男は額髪を剃りて長年のぬくけて義とか
さし是を野郎と号し野郎といえ薩摩の詞也
さて代今都の野郎は額髪を僅に二銭計廣く剃
剃て常に紫の額帽子をかぶり袖に留て長年の姿
こはんとして女人出家の如ふる舞て多く蕩と事方紙
是一見人物を仕情こなきる也野郎頭巾ゆ誰
ゆさして所代破滅の町人京庚中に多きこの也遊
女所多くなりたりそよりうきの手代数万人都
會の地に諸人も多く集る故其中に必ず壮

淫乱なる者にして人の妻とそのほか人の娘をとることを恥ずかしいと思はず、あれい西の事切害是れ外
なる所業なり。小乃至聖人の法世なりいにしへ代
よりなくて叶はざる事なり。此悪事に染まざるこそ
うるわしき遊女町をこの公儀より立てなん。此
故より繁昌の地よい遊女町事也。元来不作法なる
人のあり止事と得ることなく遊女町なるべ人
是れ法度也。すべてのものも方人の中心故四民の間ふ
変事あることを世理を知らず遊女を数人を
止事と得ることなく不作法者の同類と為れば口惜

古乃遊女白拍子なるいにしへ新しい奇怪法入い仏道の
ことなるべきもの小奇なるべきもの人の教訓なる事
をそれで今は遊女奇麗姫の数よりあるとやさしきの
こと多くなりてこれこれ小奇なるべきもの古の小奇なるべ
この新しい其唱雅いにまて人れ名称を世俗の教訓
なるべき事多し童幼のもの多き古のいかふよそ
へて代を風しなるべきなし育て上げ人よ名と付
る新しきあり今は小奇いは其ことさ甚しく其唱雅
も新なき後ろ引て婬乱不道の媒なるべきの事い
若き町人をゆめくそあるべきいにしへ

或人の云ふ童のわざけうなる業あり古よりつたへ
来る事にい其子細わる事ハ医書に未代よりて其えの
道理とゝろを尽ひ侍るゆゑあり春の頃ハ町人ハ子共
いとのわりと揚る事ハ異国おしわる事也童幼乃
紙鳶ハ幼児い門ハ常に陽熱盛なる故春湯の頃
ゆゑ其氣いよ〳〵方過とる故に紙鳶を造りて空に
是を揚て童児ハ人毛ハ紙開うめて門熱を上り
減して病をまぬかれんゆゑ纉博物志にて
さう人今代日本ハいとのわりい廣く大はけとう紙付
て空ハ揚ひ〳〵紙ハ童子い初金長年ハ寿し

是と歌ハ事あり七夕ハ乞巧とゝろ田地麥苗を踏損ハ童
子ハ養性とゝ此ゆゑ久くとる府い精氣紙上につり
ひゞをて人ハ氣紙虚をしむ古のいとゝろハ烏賊乃形ハ
ちいさく造りて麻の糸紙付てのゝちゝ春の日風吹ゆ
かゝ仙ハ湯氣ハつまて二三丈計に揚て小児童幼乃
糸紙ひゝ志あて悦ハ也唐土ハ鳶の形ハ造る
ゆゑ紙鳶と名付ハ烏賊乃形ハ造る人日本ハ
いとのわりたいゝ也又ハ凧紙の面と
ハ神社の比ハ多くハ凧紙の面と
て童子ハ地を打事あり〳〵ハ紙紙ハ田舎ハ

田鼠のまきといへる田鼠ありて土地を穿ち潜るを
行きあたるのよまに若牛馬犬猫乃類は股肝に伏す
あれは忽ち死す草木の所は穿つ時は草木則枯る
こゝの世界故よ春陽乃地上に盛なる所ありて件の
老葉を造て地を打て田鼠を捕ふることを潜伏せしむ
其所は右のまさらしむる其外がものぐらも手前よるの事也
往来の人をうら女人ある戯るゝ
此子細は恚と云て唯童子の戯を喧嘩に成しし近代は
しかるゆへ今はもぐらを打人なしといふ説し
一武町人若き時の艱苦をして老後に富りといへる

文不通なる者よ物ひかもあきてのられてれかく
は字に銭をもひてれものといひかる紙子なる者は文盲に
もかりけまい餘りに閑なるにてて猶ていかさてをく以
やらてて見えてるといひられはおやらを稼ぎすそうるす
いさんか下手は下手その調子て似合しけまあのしの議
も知れかでねがいやするものをといひしかや
一武人は云通代は町人なるの名は一ふめくゝ名多
しおいは兒人えし結句知りさき名多く見え貫之が童
名とあくまぐといひしらや又女の名よくそといふ事有
古今集よりさくらの字を濁りてよむ也といひたり

ようや小児の名をいかようにつけようかとて
つまらぬ長い其子長兵衛そのほかそれにつけて名付ようと童名の
下に丸を付る事も中古の風俗を入る器物抜よ
りつけようとていつぞのたらし武書ふんどうもの
をまねんとて下ろ智ひ也人丸仲丸のごとしいつまで
世をれきたりの名代其後そのごとしはるる事
とうてとう結句町人百姓の子よい丸と付ていつの事
か丸といえども常に不浄小遣き身にて息男
ゆへや異国にてもよい人に結句名と付ける
ようや孔子に清子まいまひ所武人興漢と是名れい

清子の名と鯉と付まひ数也古の人は名い韻鏡をて
ゆて吉兵衛吟味して付る事和漢小唐にて代代
い貴名かと吉兵と擬して付事いとは福寿の字を
を受るまやいかに又日古の町人百姓よい清門名字の
假名をもて孔世已後武士計ばかりの人庶人いかく
迄居るりの迄にて清門名字に風俗いつれく土民まで
稱るりの迄にて清門名字に官名をれいつて町
人百姓に付ける筆也古の百姓商人の新姓二字名
を付ることにてこれ所いこれをもて名ける人今所い名字
清門を付人おくまれる所あり乱角ゆまれるもい

時節あるていなれども事物の宜
しきを考へて害なれものなりといへり
或書に云日本は異國より遠いて神系と云ふべきを
て高家みな神胤の血脈なる道德廣才遠き
人いまと公家武家の中より出る者也とあり或人是
を論していはく此書の說其理いまだ委しからず植て
みよ花のそぐれ里も色といふ奇い誰も知ふ所事
なるべし素より意氣付なる人のなれや夫人間は陰陽
五行の神物なり其始る時の源なく都鄙のうつり
かはりなれば出胎已後漸くおのづから慶よりつ

尊卑都鄙の品おのおの此數より都の小兒鄙にて成長
する所は則鄙人は風俗なり鄙は小兒と都にて成人
やはり則都の風俗とおのづから町人なりの中にいまだ先
祖歷々なる處は者多き色といふは常は町人より稽
なる人品なれども愛宕殿高雅なるいと高の名と
なるなれば町人百姓のなりなれども幼なりなる人なり
なれば寶廣才なる者し者より多く出る事有
徳て高貴なる人は胎内より氣より解物なるはなる所
なり此人なる事同事合なる衣服のそなへゆなる
なるべきなり事物をはなれ

こゝろざしなきよりして書も学問もなくして成長するゆへ下賤
書文学才藝し御執行委し所人百姓の子い胎内より
市井の風俗ようみ幼少より薪より水汲土堀の業又
い荷より細工多紙要用とする故に筋骨こゝ
あらく愛嬌ぶきなり能書文学乃暇ゝ偶暇
有ても筆骨こゝろくて筆とゝ成ゆへ思想能書の
時あり人い物ゝ後漢ゝ成ゆ
とゝいつゝ下賤土民のゝ中ゝ出ゝ
富貴の家ゝて成長ゝ能書文学の誉れ
有人ゝ多く出ゝ

ゝ成ゆ
多ゝ貴人ゝ血脈いみなおのゝ君子となる理なり
い胎教のゝ幼儀のゝ
徳行博才ゝ人ゝ成る理なゝ
ゝあゝ不徳ゝ成ゝ
元早ゝ血脈ゝ胎教の道ゝ
ゝ君子ゝ傍小ゝて
幼儀ゝ習ゝ才藝ゝ
天性命分ゝ品ゝ
其人品高位高官乃人ゝ

人間に根本なれば人倫を早方べき理なり唯生ぜんと
と知べし傾城に名くい下賤なる者の子なれども
幼少より風流よみ書き学ぶ故諸人と雑なるの
楽風俗しるれり況や人間本分の上に於て何ぞ
貴賤の差別あんいるを賤しめやか岳てを
ぶい万人の上に延んものなり家に氏筋と云て
家は威と選く志ぶんの家なり町人の氏筋
をもつるい必と貪欲の相なりとや
或人の云茶湯に漢倉北条の末に興ると高時入道
武家に数人の名くて千剣破の城寄手百服

茶湯と致して遊びなぐさめしを手柄よんでこれをのち
足利将軍義政公に名を盛ぶ世の風流と好む人多し
是武数人事に成り是茶人出て世に成て廣
大閤秀吉公に沛時ふ数て土庶人ふ此道を学て
是に成ると紀人を以て世に弥人に其根本は禅家浸透
其の神を以て質素閑静を学ぶ故に風流道
義に成ぬ故に成る数質素に似て實の質素に
あらず閑静に似て閑静にあらず此数に乱世に近
き北条の末に於こり高時に長く義政公に盛ぶして
秀吉公に驕世に遍く是一何ぞ久しかりて乱世

代なれい不吉の兆しとなるや黄代は動てい千年以
来の治世なれい尤茶湯の道廃て絶へき事なれも
往古さわて茶湯昔れ始めて世に出る是其
道の損徳利害代人皆ひきまつる故まや兎角奇麗風
流乃公用なれい貴人なる位の樂にて町人百姓
乃絶へき道よいわれ尤侘茶湯なれて竹の筒
瓢箪なれてこげと呑て其心閑静清浄なる
是と侍らの茶人といなるとも人なれ其心閑静
清浄なれ人なれいわれらは粉ぐ〻茶用いて茶人
といなれと元本来自然の浪道者なれへ何ぞ

何ぞいとそんや町人百姓なく是ホの人はまるいと
きんも又何あるべき茶ホ好む人なれ只茶ホの
酒と嗜む人い只酒を飲菓子好む人い菓子と喰
へ共なみる飲合なり然れ酒とのく茶ホ人
人いまなる茶のうちなく道具器物の風流とする
事ときらす茶而ホとなれ風俗と好むる心
得なるといい

武人のいとれい町人い蟻の如くに金物紙財へ所を
こ紙つもへ蜘蛛れこ網とるる居おるる物
乃命とるて合るするんぐひのるる事へるる唐土

り王字一と云て人い蜘蛛の若ものゝ物の命をそ
て合ゝる事紙悪くして常に竹杖をもらて蜘蛛の
網を見るゝひよ杖り云かさくいつるゆゑ蟻
い云ゝく義ある虫なり此杖よ虫の偏よ義乃字紙
流ゝる後日推来して合物を求め宅中に貯へ冬て
冬の用意とす物のまゝ求得ゝる合ゝるとおのゝ
ひゝゝ人合ゝをゝ穴ゝ行る飛ゝ若ゝ町人の四方
小働さつゝて財を求め家門と若ゝる蟻乃ぬ
く為ゝ油断なくして家紙をもつへ蜘蛛い智
謀ありて物乃命と誅罰と此杖り虫の偏よ知

乃字紙流又誅の字紙略して朱の字紙付ゝる町
人い是紙悪しゝ謀計をもつて公儀を賺して
諸人乃浚世紙物のを二人を少清貧欲非義乃
網を張つ居ゝ万人をくらはして物乃れう
身と富実ゝるゝ為ん不仁の甚ゝきゝの迹
王字一の悪ゝる事又最ゝゝや町人ゝ仕者
第一初へき虫なりと諸ゝ稔ゝ

町人囊炎四終